

# 琉球大学学術リポジトリ

《道徳実践報告》自分の考えを伝え合い、深めることができる生徒の育成：  
道徳におけるアクティブ・ラーニングの視点を取り入れた授業づくりを通して

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属中学校 公開日: 2020-06-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 新垣, 元子, 新垣, 真, 浦崎, 多恵子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/45997">http://hdl.handle.net/20.500.12000/45997</a>

# 自分の考えを伝え合い、深めることができる生徒の育成 —道徳におけるアクティブ・ラーニングの視点を取り入れた授業づくりを通して—

新垣元子 新垣真 浦崎多恵子  
琉球大学教育学部附属中学校

## I 主題設定の理由

### 1 社会的な背景から

2015年に学習指導要領の一部改正があり、「特別の教科 道徳」、道徳科が誕生した。その道徳科の目標は、「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める学習を通して道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる」<sup>(1)</sup>と示された。子ども達に人間としての生き方についての考えを深めさせ、よりよく生きるための資質・能力を養うためには、道徳の授業においても、子ども自身が様々な問題(課題)を主体的に解決する学習が必要となる。今回の道徳科への移行により、主人公の気持ちを考える道徳、心情理解中心の道徳から、「考える・議論する」道徳への質的な転換が図られることになり中学校では平成31年から教科書を用いた「特別の教科 道徳」が完全実施される。そこで本校ではこれからの時代を生きる子ども達に、「よりよく生きていくための資質・能力」をはぐくむことをねらいとし、「自分の考えを伝え合い、深めることができる生徒の育成」を目的として、道徳の学習において、全職員で課題解決に向けたアクティブ・ラーニングの視点(主体的・対話的で、深い学び)を取り入れた授業実践に取り組むこととした。

### 2 これまでの実践から

#### (1) 成果

- ・「課題解決的な学習」を意識した授業の実践に取り組み、生徒のアンケート結果からも、「考えることが難しかった」「みんなの意見が聞けた」などの意見があったことから、生徒の道徳の時間に対する興味・関心が高まったと考える。
- ・全職員で協力して、「ローテーション授業」を実施す

ることができた。多様な資料活用等の工夫を図ったことで、生徒が自分自身のことについてしっかりと考えることができ、価値の自覚を深める道徳の授業に迫ることができた。

#### (2) 課題と改善点

- ・1時間での成果としては、「自分の考えを持ち、深め合う」生徒の姿がワークシート等の記述から確認できたが、生徒が自身の生き方につなげ、道徳的实践や行動の習慣化を図る指導については継続して実践を深めていく必要がある。
- ・全職員が自分の捉えでの、「アクティブ・ラーニングによる道徳の授業」を実践したが、「考え、議論する道徳」の実践になっていたか、その判断も不明瞭のまま終わってしまった。全職員の共通理解や方向性の確認が必要である。

### 3 生徒の実態から

本校独自で行っている、全国学力・学習状況調査の生徒質問紙における生徒の実態としては、道徳に関わる質問に対して90%以上の生徒が肯定的な回答をしている。しかしその中で、「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか」という質問に対して約10%近くの生徒が否定的な回答であった。実際本校の現状を見ても、友人間のトラブルやSNS等を用いた誹謗中傷など、生徒間でのいじめに発展しうる問題も発生している。これまでも道徳の授業において他者との関わり方や友達や仲間との友情など、道徳的価値として実践されてきている。その際の生徒のふり返りでも、価値を十分に理解していると思われるものであった。それにも関わらずこうした問題が依然後を絶たないのは、道徳的価値を生徒自身が自分事として捉えられていないということを表していると考えられる。



## II 本実践の目的

本実践の目的は、道徳におけるアクティブ・ラーニングの視点(主体的・対話的で、深い学び)を実践することにより、生徒が主体的に道徳の授業に参加し、道徳的諸価値について自分なりの答えを見いだすことである。また、課題解決的な学習を取り入れ、伝え合う活動を通して、自分の考え持ち、深めることができる生徒を育成する。

## III 目指す生徒像

道徳的諸価値について自分なりの考えや意見を持ち、他者と伝え合う活動を通して、自分の考えを深めようとする生徒。

## IV 実践内容

### 1 「自分の考えを伝え合い、深める」とは

本実践主題「自分の考え」とは、道徳的諸価値について自分はどうか捉えているのかを認識し、表現できることである。また、「伝え合い、深める」ことで、子どもが常に自己の生き方を見つめながら、みんなで多様な視点から話し合い、語り合うことを通して自己のよりよい生き方を考えていく学習であると考え。他者と関わりながら課題を解決しようとし、本音で語り合える道徳授業の実現に向け、教師間で共有しながら授業改善の取り組みを共通実践することとした。その実践を通して、「自分の考えを伝え合い、深めることができる生徒」が育成されることが考えられる。

### 2 道徳におけるアクティブ・ラーニングの視点とは

柴原(2016)は、『「アクティブ・ラーニング」の視点は、道徳の授業改善を考える上でも重要な視点であり、大切にしていかなければならない』<sup>(2)</sup>と述べている。道徳におけるアクティブ・ラーニングの視点とは、各教科でのとらえと同様、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」を実現することである。つまり、課題解決的な学習を取り入れ、生徒の思考を促す工夫を行うことで、生徒一人一人が生きる上で出会う様々な道徳的諸価値に関わる問題や課題を主体的に解決するために必要な資質・能力を養うことができると考える。また、対話による深まりのある道徳授業を展開し、自分とは異なる意見と交流することによって、道徳的価値の捉

えを再構築することにつなげたい。

## 3 具体的取り組み事項

「特別の教科 道徳」の誕生の経緯として、現在行われている道徳の時間は「教材を読むことに終始している」と、形骸化を指摘する声も少なくない。それを踏まえ、今回の指導要領変更点では、問題解決や体験的な学習なども取り入れ、対話による深まりのある道徳を目指している。また、「何を知っているか」だけでなく「知っていることを使ってどのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」の資質・能力にまで引き上げることを目指すとしており、教師は今まで以上に多様な展開と指導方法の工夫が求められている。それらを踏まえ、本校では目的を達成するために、以下の実践に具体的に取り組む。

### (1) アクティブ・ラーニングの視点を取り入れた実践

本実践では、各学年において、「主体的・対話的で、深い学び」が実現するために、生徒が「主体的」に授業に参加し、必然的に「対話」し合う場を設定する。また、導入・展開・終末での「深い学び」を引き起こすための発問を工夫する。

### (2) ローテーション授業の実践

#### ① 同一教材・授業案による「ローテーション授業」

学年の職員全員で関わり、作り上げた授業をひと学級で実践し、それを学年の職員で検証、改善し次の担任が自分の学級で実践する。その一連の活動を繰り返して全学級同一の教材、授業案を基に道徳の授業が展開される「ローテーション授業」である。全職員で授業を構想(P)し、実践(D)を行い、検証(C)し改善・評価(A)することで道徳の授業がより充実したものとなり、目指す生徒の育成につながると考える。また、このサイクルを繰り返すことで、教師の授業力も高まり、道徳授業の質も高まっていくと考える。

#### ② 職員が全学級を回る「ローテーション授業」

各学級担任・副担任がそれぞれ分担して全学級で授業を行う、「ローテーション授業」を実践する。教師間で授業を参観し合い、工夫改善に努めることで、道徳の時間の充実を図ることを目的とする。子どもと共に教師も主体的・協働的に学び合うことで、授業技術を高め合うことができると考える。



## IV 授業実践

### 1 第1学年の取り組み

#### (1) 主題名 「相互理解」

- ・内容項目 B-(9) 相互理解・寛容
- ・資料題名 水登伸子「2人の約束」  
『あすを生きる1』日本文教出版

#### (2) 内容項目(ねらいとする道徳的価値)について

いろいろなものの見方や考え方があることを理解し、それぞれの個性や立場を尊重しようとする心情を育てる。

#### (3) 本実践の目的

人によって見方や考え方は違っていることを認識し、その上で他の意見を認め合うことができるようにすることを目的とする。

#### (4) 実践内容

##### ① 資料について

中学生の主人公とユウコはけんかを境に話し合い「気づいたことや思ったことは、ちゃんと言い合っていこう。」という「約束」をした。しかし、ユウコは主人公の財布や髪型、気に入っている歌などについてもひどいことを言っていた。主人公は我慢して自分を納得させていたが、ある日ユウコに「私ばかり我慢している。」と気持ちをぶちまけた。二人の「約束」には認識のずれがあり、その後主人公はハッとしてユウコともう一度話し合いたいと思ったところで話は終わっている。

##### ② 議論させ、価値について考えさせる工夫

「二人の約束が必要であったか」に対する答えとその根拠を考えることを通して、登場人物二人の認識の違いをとらえる。ベン図によって二人の違いを確認した後、グループで意見交換し、全体で意見交換を行うという段階を踏んだ。問いに対する考えが様々出てくることによっても、互いの考え方の多様さを学ぶことができる考えた。

##### ③ 自分ごととしてとらえ議論させる工夫

約束が必要であったか考える前と、登場人物のどちらにあてはまりそうかまたその理由考え近くの人と考えを交流させた。また、登場人物2人の心の距離感について、約束の前後でどのように変化したか可視化し、

個々の生徒の違いを視覚的に確認できるようにした。

#### (5) 実践の考察

##### ① 生徒の学習の評価

本実践を通しての生徒の感想を記す(下線は授業者)。

**生徒A**「仲の良い友だちには何でも言えるようにしているけど、相手がどのように考えているかわからないから、どのように接すればよいのかをしっかりと考えて相手とコミュニケーションをとり、自分の考えを言いながら相手の意見も受け入れてから接していきたい。」

**生徒B**「今日の学習で、自分の意見だけでなく、他の人の意見に納得ができ、考えも変わり他の考え方ができたのでよかったです。」

**生徒C**「お互い自分の意見が間違っていないと思って接していたからくい違いが起きて大変だったけど、しだいに考えがわかって仲良くなったので、まずは相手の考えを受け入れたりすることがいいのかなと思いました。」

生徒の感想の下線の記述からは、考え方はそれぞれ違っており、お互いにそれらを尊重することが大切であることに気づいていると考えられる。一方、それぞれの考え方が違い、それらを認め合っていくことについて4分の1の生徒の記述からみとることができなかった。発問や授業展開などを改善する必要がある。

##### ② 実践を踏まえた授業の振り返り

本実践は第1学年の職員全体で指導案を考案した。3回の授業の各回ごとに、授業の振り返りを行い、発問や流れについて生徒の様子や記述を読み取り検討した。その中で副読本の内容項目では「友情」の扱いであったが、生徒の実態から「友情」の根底にあるお互いをわかりあおうとすることが必要であると考え「相互理解」に変更した。変更自体は良かったが、資料を使って生徒になってほしい姿をイメージして教えるのと同時に、教師自身がこの資料で「何を考えさせたいか」ということにも着目して授業を作っていきたい。

また授業の終盤の学習活動を振り返る場面で、初発の考えから意見を変える生徒もいた。意見を変えなくても初発の考えに比べ根拠が明確になった記述もあったので、これからの授業作りにおいても振り返りの場面をどこで設定するかをしっかりと考えていきたい。



## 2 2学年実践事例

### (1) 主題名「真の友情とは」

内容項目【キーワード：友情、信頼】B-（8）

資料題名「ロレンゾの友達」

（新版 中学校道徳 あすを生きる2 日本文教出版）

### (2) 内容項目（ねらいとする道徳的価値）について

内容項目【B-8 友情、信頼】「友情の尊さを理解して心から信頼できる友達をもち、互いに励まし合い、高め合うとともに、異性についての理解を深め、悩みや葛藤も経験しながら人間関係を深めていくこと。」

### (3) 本実践の目的

本時は、「真の友情とは」について考えることで「心からの友情や友情の尊さについて理解を深め、自分を取り囲む友達との友情の大切さ」に気づかせたい。

### (4) 実践内容

#### ① 資料について

本資料は、会社の金を持ち逃げした疑いを掛けられ警察に追われているロレンゾという友達に対し、アンドレ、サバイユ、ニコライの3人の友達がどのように対応していくか悩み、葛藤していく中で、本当の友情について考える資料である。3人はロレンゾのことを思い、アンドレはお金を持たせて逃がす、サバイユは自首を勧めるが本人が納得しなければ逃がす、ニコライは自首を勧めるが本人が納得しなければ警察に知らせるという対応を考える。3人は眠れないまま夜を明かす、という内容である。本来は、その話が誤解であり、ロレンゾは無事釈放され、4人は再会を果たす、という内容であるが、3人の言動から友情に迫りたいため、最後の部分は本時では読まずに展開する。

#### ② 議論させ、価値について考えさせる工夫

木の下で話し合ったアンドレ、サバイユ、ニコライの3人の考えをまとめ、それぞれの友情に対する考えのポイントを板書で可視化する。その後、誰の考えを「ロレンゾ」に伝えるべきかを班で考えさせる。本時では、授業始めで、「友情とは何か。友情を感じる時はどんなときか。」をおさえ、「友情の定義」を全体で共有する。その後、個人で考え、班で課題に取り組み、班で一人に絞るという課題を通して、班内での意見交流から全体へ声が挙げられない生徒でも、班内議論に参

加させる。

#### ③ 価値に迫るための切り返し発問の工夫

単に「誰の意見がいい」という判断にとどまるのではなく、なぜそう考えたのかを理由付けさせ、「真の友情」に迫っていく。また、導入時におさえた「友情の定義」と、全体交流の場で挙げられた意見とを照らし合わせ、矛盾点を付き合わせる。その際、「あれ？なんで？」「違うよ」など、生徒の「言いたい、発言したい」気持ちを出させるような発問を行い、その後の思考の変化と深まりに期待する。その後、再度「友情とは」について再度定義させ、「その選択が本当の友情なのか」という問いで子ども達に考えさせる。

### (5) 実践の考察

#### ① 生徒の学習の評価

「友情とはどんなものだと思いますか」の問いに対する授業前の記述と、授業後の記述の変容を比較する。

生徒Aは、授業始めの問いでは、「何でも言える」や「信頼できる」という記述であったが、授業後の感想では、「ロレンゾの3人の友達は、それぞれ考えは違っていたけど、ロレンゾのことを思っているということが共通している。だから友情とは、自分のことよりも相手がどうして欲しいのかを考えてあげられることだと思う。」という記述になっていた。全体での共有後に、生徒Aの「自分はこの意見に反対だけど、思いは友達としての行動だと思う。でも反対。」の発言に対して、同じ班の生徒Bが「でもアンドレも友達のことを思ってるんじゃない？」と補足していた。授業後の感想の記述から、対話を通して新しい考えに出会い、思考が深まったと考察できる。

#### ② 実践を踏まえた授業の振り返り

本実践のねらいは、教材の道徳的価値を理解させ、生徒の道徳的実践力を養うことであるが、それを達成するには、教師の授業力を向上させることが必要不可欠であるということに、改めて気づかされた。今回公開授業を実施するに当たり、2学年職員全員で授業構想を練り、3回の検証授業を重ね、改善した経緯がある。全職員で目指す授業のゴールを共通確認し、実践、振り返りを行うことで、教師の授業力向上につながったと考える。それを繰り返すことで、生徒の道徳的実践力の育成につながると感じた。



### 3 第3学年の取り組み

#### (1) 主題名 「異性理解」

・内容項目 現 2-(4)正しい異性理解と人格の尊重  
新 B-(8)友情、信頼

・資料題名 白木みどり「アイツの進路選択」  
『中学生の道徳 自分をのばす3』沖縄県版あかつき

#### (2) 内容項目（ねらいとする道徳的価値）について

異性に対する理解につなげるため、信頼と敬愛の念を育み、互いに向上していこうとする心情を育てる。

#### (3) 本実践の目的

異性に対して正しい理解を深め、人間として、異性としての良さを互いに認め合うことができるようにすることを目的とする。

#### (4) 実践内容

##### ① 資料について

中学3年生の真一と夏樹は幼なじみで中学1年生の中頃から付き合っている。その二人が進路選択という大きな壁に直面する。真一は2回目の進路希望調査の提出にあたり、本当に1回目の進路調査で書いた高校でよいのか迷っていた。夏樹は、真一と同じ高校に行くと約束していたので、真一が自分の希望する高校とは別の高校を選択することに戸惑いを感じる。その後、夏樹の母親から電話で、夏樹が自分と同じ高校に進路希望変更したことを知らされ、真一は言いようのない不安と戸惑いを感じるのだった。

##### ② 議論させ、価値について考えさせる工夫

本時では、役割演技の疑似体験的な表現活動を取り入れる。この活動を通して、自分も相手も尊重する態度を培い、異性を正しく理解するきっかけとしたい。

##### ③ 議論しやすくする工夫

女子は「夏樹」に、男子は「真一」になって負の感情の本音を吐露する。そうすることで、心の奥底にあった自分の本当の思いに気づくだろう。負の感情を出し切った後に設定された「今、本当に相手に言いたいことは一言で言うと何ですか？」という授業者からの問いかけで、愛おしい自分と相手への慈しみの感情が生まれてくることを期待したい。

#### (5) 実践の考察

##### ① 生徒の学習の評価

本実践を通しての生徒の感想を記す（下線は授業者）。

生徒A「今日の授業を通して、改めて自分を見つめ直すことが大切だということがわかりました。好きと進路は違うけど、いずれはつながっていくものなのかなと思いました。」

生徒B「好きな気持ちは自分のことだけを想うのではなく、相手のことを想うためにあると思います。だから“自分の気持ち”と“相手を想う気持ち”が違っていて悩むと思うけど、最終的には自分の人生だから自分が正しいと思った道に進んだ方がいい。」

生徒C「自分には自分の将来があるから、好きな人と同じ高校じゃなくても、自分が行きたい高校に行くべきだと思った。約束していたからといって、相手の進路を自分と一緒にしようとするのは、相手のことをちゃんと考えることができていないと思う。」

生徒の感想の下線の記述からは、進路選択の大切な場面において、自分自身を見つめ直し、相手の立場に立って考えながら、異性についての正しい理解を深めることができていると評価できる。

##### ② 実践を踏まえた授業の振り返り

本時では、役割演技の疑似体験的な表現活動を取り入れた。その後、個人で考えたことを対話によって互いに伝え合い、最後はクラス全体で共有した。このような活動を通して、ねらいとする道徳的価値にせまることができたと考える。

本実践は、第3学年の職員全体で指導案を考案した。生徒の実態に応じて資料を選定し、計4回の指導案検討会を経て実践した。検討会では、発問や生徒の活動を変えると、ねらいとする道徳的価値に対して、生徒の考え方がどのように変わるのかを話し合った。このような検討会を通して、授業に工夫・改善を加えることができたことが成果と考える。また、学年で指導案を作成したことで、指導案や教具を共有することができ、授業者の負担感の軽減にもつながったと考える。

今回は、本実践の指導を生徒の感想から評価した。課題として、今後は長期的な視点で生徒の成長を見取る必要がある。例えば、道徳ファイルに蓄積させ、一学期に比べて道徳的な見方・考えに変化があったかを自己評価させることもできるのではないかと考える。



## VI 実践の振り返り

### 1 成果

#### (1) アクティブ・ラーニングの視点を取り入れた実践

本実践では、「課題解決的な学習」を意識した授業に取り組み、その中で生徒が「主体的」に授業に参加し、必然的に「対話」し合う場を設定した。

1学年では、思考ツールである「ベン図」を用いて展開した。「ベン図」を活用し、まず自分の中の「私」と「ユウコ」の関係性を整理し、班内で相違点を整理した。思考ツールを用い自己内対話し、可視化することで自他の考えをメタ認知することができ、新しい発見へとつながっていた。

2学年では、議論する場の工夫を行った。全体共有の場になると決まった生徒のみの発言になってしまうので、まず班内で自分の意見を述べる場を設定した。その際「アンドレ・サバイユ・ニコライ」の誰の考えが友達としての判断かを一つに絞らせた。一つに絞らせることで、班内での議論が活発に行われていた。

3学年では役割演技を取り入れた実践を行った。生徒が「夏樹」と「真一」になりきることで「本音」をはき出し、出し切った後に見える新たな感情と一人一人が向き合っていた。異性理解の価値項目は、思春期まっただ中にある中学生にとって、抵抗感のある題材であるため敬遠されやすいが、本授業では自己の内面を見つめ直す様子が見られた。

それぞれの学年での授業後に、「〇〇についての考えが変わった」「〇〇さんの意見を聞いて、違う意見もあるんだなと思った」という感想が多数出たが、「いろいろ考えるうちに、余計意味が分からなくなった」や「家でも家族に聞いてみたい」という感想も見られた。これらは、各学年がそれぞれに、「思考ツール」「グループ形態」「役割演技」を適所で活用し、対話する場の工夫を行うことで、生徒が自己や他者との対話を通して、価値への深まりに迫れたからこそその感想ではないかと考える。

また、生徒に行ったアンケート「道徳の授業でどんな力が身についたと思うか」では、去年は「思いやり、気遣い」といった心の成長を表現する記述が多かったが、今年度はそれに加えて、「解決する力、自分の考えを作る力、判断する力」など、深く考えるという記述が多くなっている。この結果はアクティブ・ラーニングの視点を取り入れた実践の成果であると考察できる。

#### (2) ローテーション授業の実践

##### ① 同一教材・授業案による「ローテーション授業」

全学年において、PDCA サイクルを活かした授業づくりを実践することができた(図1)。

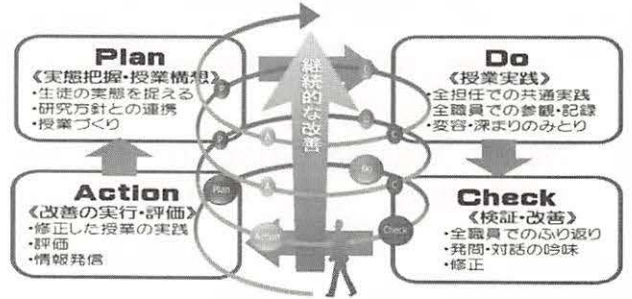


図1 PDCAサイクルを活かした授業づくりイメージ図

一つの授業を、複数の教師で練り上げ改善していくことで、構想の段階では見えていなかった生徒の思考の流れが明確になり、教師の新しい発見や見とりにつながった。また、PDCA サイクルの機能を活かした実践を行うことで、共通のゴールのイメージを持つことができ、目指す生徒の姿を意識した実践ができた。また公開授業だけで終わるのではなく、そのサイクルを継続して行うことで、教師の道徳の授業に対する意識も高まり、授業力向上につながったと考える。

##### ② 職員が全学級を回る「ローテーション授業」

全職員で各学年の全学級を回る「ローテーション授業」では、それぞれ教科の持ち味を生かした実践を行うことも可能であった。一人の教師が複数の学級の授業実践ができ、その都度他の参観者との振り返りを行うことで、次の授業を再構築できた。参観者にとっても、多様な授業を見ることによって学びになり、生徒の様子や表情の変化を見とることができた。また、生徒の感想から、「毎回違う先生が来たので、考え方が広がった」とあった。担任以外の教師の価値観に触れることで、新鮮な発見や、多様な見方・考え方を持つことができたのではないかと考える。

## 2 課題

- ・道徳授業の流れ(疏附スタイル)の確立
- ・発問(中心・補助・問い返し)の工夫・実践
- ・道徳科授業の指導と評価の一体化

### 〈引用文献・参考文献〉

- (1) 文部科学省『中学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編』(平成27年7月)
- (2) 文部科学省教育課程課編集『中等教育資料⑥』(平成28年6月)